
君の温度

SOLID HEART

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の温度

【Nコード】

N5082W

【作者名】

SOLID HEART

【あらすじ】

大学生（♂）が恋をした。

その相手は……えっ？ 幽霊？

「幽霊って足あるんだな」BY 直人

夏の日

俺は、確かに感じたんだ。

君の温もりを。

それは、紛れも無い、君の存在証明。

とある夏の日。少し散らかった部屋で、俺はコンポから流れる音楽を聴いていた。

「なあ、タク。このドラムのリズムどうよ？」

「んゝ、アツいねゝ」

「だろ？ やっぱこのバンドの曲はロックって感じがするよな！」

「んゝ、本当、暑いねえゝ」

「気温のことかよ。ってか、俺の話聞けよ！」

「まあまあ。ちゃんと聞いてるって、直人^{なあと}くん」

暑くてしょうがない、という顔をしているこの男。俺と同じ大学に通っている二年生で、タクと呼ばれている。こいつとは中学時代

からの縁で、よく一緒に遊んでいた。

「ところでタク、歌詞は思いついたのか？」

「いやゝ、暑くて暑くて頭が働かないわゝ」

タクはそう言うとテーブルに突っ伏した。

「まあ今日は確かに暑いけどな……」

俺達は大学の仲間と四人組のバンドを組んでいて、俺はドラムを、タクはギターとボーカルを担当している。今日は俺の部屋でオリジナル曲のアイデアを考えることになっていたのだが、他の二人は都合が悪くて来れないらしい。

「あーっ！ 暑すぎる！ ていうかなんでこの部屋クーラーついてないんだ！？ いじめですか直人くん！？」

この暑さにタクがやられかけている。

「無い物はしゃーねーだろ。エアコンのある部屋は母さんが掃除してるし」

「ならばお主の母親を！ 母親を！」

何をする気だこの男は。

「やめとけ。あの人は俺を片手で投げ飛ばすような生き物だぞ」

「素晴らしいお母様ですね」

タクが扇風機と仲良く向かい合ってる横で、俺は楽譜と向かい合

っていた。

「面白いリズムだな。フィルインも参考になりそうだし」

好きなバンドのスコアを見ながら、オリジナル曲につけるリズムパターンを考える。こういう作業はやっぱ楽しい。没頭すぎて丸一日ということもよくある。大学のレポートなんかもそっちのけだ。小さい頃から好きな物には時間を忘れて熱中していた。

今では何が面白いのかわからないオモチャや、徹夜でレベル上げをしていたRPGゲーム。

高校では軽音部のドラムに惹かれ、即入部。ひたすら叩きまくっていた。

「直人くん、自己紹介中に悪いんだけど…アイスとかない？暑すぎて死んじゃう」

コノヤロウ。俺の頭の中はお見通しってか？

「あ、ああ、待ってる。昨日買ったやつがある」

俺は立ち上がって、部屋を出た。後ろからは扇風機に向かって「ああ、あゝっ」と唸り続ける馬鹿の音がする。

「ったく、あいつは何しに来たんだよ…」

2階から1階へ降り、キッチンの冷蔵庫へ向かう。母親が掃除好きなか、家の中はいつもすっきりしていてキレイだ。キッチンもちちゃんと整理されている。

「さすが母さん。冷蔵庫のなかまですつきりしてる」
飲み物の棚がタバスコのビンで満たされているが、細かいことは気にしないでおこう。

「さて、アイスアイスつと」

アイスを求め冷凍室を開ける。そして昨日買っておいしたアイスを……
…つて、あれ？

「アイスが無い……」

ソフトクリームやらモナカやらを買い込んでいたはずなんだが、まさか全部食べられたか！？

「いや、あの量だ。さすがに全部食べるわけないよな」

そう思ったものの、万が一ってこともある。念のため推理してみよう。

思い当たる容疑者は2人。母と妹だ。

妹は今、高校の部活に行っている。お菓子を食べるときは、いつも「食べていいーい？」などと、俺に確認をとる。決して独り占めなどしない。

母は今、家の掃除をしている。お菓子を食えるときは、誰が買った物であろうとお構いなし、しかも無断で食べる。決して分け合うことなどない。

うーん、アイスを食べたのは…

合宿の名の下に

「母さん！　アイス全部食べただろ！」
和室の掃除をしている母に問い詰める。

「ええ」

あっさり認めたな。

「やっぱり。いくらなんでも食べ過ぎだろ……」

「ちよっとお腹空いちゃってね」

通販で買ったと思しき掃除道具おぼを手に、母はそう言った。いやいや、ちよっとお腹空いちゃって食べる量じゃないって。お腹ピーっとなるだろ、普通。

「まあ…アレだ、全部食べるならせめて俺に一言くれ」

「ええ？　もしかして横取りする気？」

「しねえよ。ってか、それはアイスを全部食ったあんたが言う台詞じゃねえよ」

なんて独占欲の強い女だ。

母親を渋々納得させ、俺は2階の部屋へ戻った。それにしても、よくあれでお腹を壊さないな。

「すまん、タク。アイスは鋼鉄の胃袋に飲み込まれた」
「マジかあ」

タクは魂が抜けたかの様に横へ倒れた。

と、思った瞬間にまた起き上がった。

「じゃあさ、どっか食いに行こうぜい」

「外に出るのか？ 余計に暑くないか？」

「店に入れば冷房きいてるでしょ」

ということで、近くのファミレスへ行くことにした。

「ひいゝ、日差し強すぎ」

タクが目を薄めながら言う。今日はこいつの口から夏に対する不満しか聞いてない気がする。

「男二人で歩くのも暑苦しいなゝ。隣が直人くんじゃなくて美女だったらなゝ」

それは俺に対する不満なのか？

「まあ、こういう時は彼女欲しいって思うよな」

実は、俺はこの20年間、彼女というものをつくったことが無い。昔から女子とも仲良くしていたし、バレンタインチョコもよく貰っていた。中には本命もあったが、付き合うという気には一度もなれなかった。自分の生活の中へ足を踏み込まれなかったのだと思う。

「直人くん、恋愛について語ってるところ悪いけど、到着しましたぜ」

「お前はエスパーか」

こいつだけは敵に回したくないな。

店に入って中を見渡すと、意外と客が少なかった。適当に空いている席へ座り、メニューを開く。昼メシを食ってなかったことに気付き、途端に腹が減ってきた。

「なあタク、何食べるんだ？」

「ドリアうまそうだな…。でもハンバーグも手堅いよな…。あ、パスタもいいな…」

そうだった、こいつはかなり優柔不断な男だった。ひどいときには20分以上迷うこともある。とりあえず俺はカルボナーラに決めて、タクが決めるのを待つことにした。

10分後、タクが悩みに悩んでハンバーグに決め、ようやく注文することができた。タクの平均的なタイムと言える。もちろん、アイスとドリンクバーも忘れずに頼んである。

「やっぱりメロンソーダだよな」

俺が注いで持って来たドリンクを飲みながらタクが言った。

「いや、タク。ドリンクはやっぱり」

「それより直人くん」

「聞けや」

せっかくドリンクについて語ってやろうと思ったのに。

「ああ、ごめん。直人くんのドリンク小話は今度聞くから」

「小話ってなんだよ。てか改めて話す気もねーよ」

何なんだこいつは…。今更始まったことでもないが。

「それより、直人さん。提案があるんですけど」

「なぜ敬語なんだ」

「私はバンドが成長するためにはどうすればいいのか、常に考えて来ました。」

「嘘だな」

「もちろん個人が成長することは大事です。しかし、それだけでいいのでしょうか！私はチームとして、絆をもつと強くするべきだと思うのです！」

「…で、提案っていうのは？」

こいつがこういう話をする時の流れは大体読める。恐らく今回は
合――

「合宿しましょう！」

「断る」

予想通りだ。こいつは合宿という名の下でバカンスを楽しむつもりだ。

「直人くん！君はアレだろう？またどうせ『こいつは合宿という名の下でバカンスを楽しむつもりだ』とか思ってるんだろう？」

「頼む。認めてくれ。お前はエスパーなんだろ？そうなんだろ？」

こいつを研究機関に突き出してやりたいぜ、まったく。

「直人くん。遊ぶつもりなんてない。真面目にバンドのことを考えてるんだ」

いつになく真剣な顔のタク。もしかしたら今度は本気なのかもしれない。そうか、やっとタクもやる気になってくれたか。やっぱりボーカルがこうじゃないとバンドは――

「フツッ」

「おいタク。今笑ったよな？我慢できなくて笑ったよな？」

それからしばらくタクに諭され続けて、仕方なく合宿をすることになった。タクも真面目にやると言ってたし、たまには信じてみる

ことにした。具体的な打ち合わせはまた後日に持ち越し、その日は
タクと別れた。

でも、なぜだろう。

嫌な予感がする。

直人とタクのドリンク小話

直人とタクのドリンク小話

「はい〜どうも、タクです」

「えーと、直人です」

「いや〜、暑い日が続きますね〜直人くん」

「タク、この『直人とタクのドリンク小話』って何だ？」

「こんなに暑いとアイスが食べたくなりますよね〜」

「聞けや」

「ここではちよつとしたお話、つまりドリンク小話をしていきます」

「なんかイマイチ状況が理解できねえけど…」

「まあ、要はこの物語について色々話しましょうってことです」

「例えば？」

「例えば…直人くんの苗字って何？みたいな」

「そつえば話に出て来てないな」

「えつと…確か…平井…平田…」

「お前覚えてねえのかよ！中学時代からの仲だろ！？」

「冗談、冗談ですよ平塚直人くん！」

「平岡です」

「……………」

「タク、本気で覚えてなかったのか」

「えー、今回はここまで！またお会いしましょう！さよなら〜」

「おい、逃げるなタク！」

直人コール

「お前らああ！！ぶっ飛ぶ覚悟は出来てるか！！」

『ウォーッ！！』

「燃え尽きても知らねえぞ！！」

『ウォーッ！！』

ボーカルの煽りとそれに応える観客の声。やっぱりライブは最高だ。
熱いね。

「今日は俺達 STAINED GLASS ステンドグラス のライブに来てくれてありがとう！次が最後の曲だ、いくぞ！！」

早いな、もう最後の曲か。…というか一曲も聞いた記憶が無いな。
なんでだ？

「おい、そこ！何ぼけ〜つとしてんだ！」

ん？どうしたんだろう。ボーカルの人がこっち側を指差して何か吠えている。むしろ俺をピンポイントで指差しているようにしか見えない。

「直人！お前だ！」

やっぱり俺だった。周りの観客も一斉に俺の方を向いた。でも、なんで俺の名前を知ってるんだ？

「直人！！」

と、今度は観客の誰かが俺の名前を呼ぶ。

「直人オアアウ!!」

と、今度は観客の誰かが俺の名前をシャウトする。

『直人!!直人!!直人!!』

そして、会場が一体となつて直人コールを始めた。どうすればいいんだ俺は。状況が把握出来ない俺を余所に、直人コールは続く。

『ナ・オ・ト!!!ナ・オ・ト!!!』

「直人オアアウ!!」

ダメだ、俺の手には負えない。誰か助けてくれ。タクでも誰でもいいから助けてくれえ!

『直人!直人!ナ・オ・ト!!!』

「——オト」

ん…

「ナオト」

ま、まだ直人コールが…

「直人」

やめてくれ…俺が何をしたって言うんだああ!

「起きなさい直人!」

「おわっ!」

飛んで来たロケットパンチを間一髪でかわし、俺はベッドから飛び出した。

ん？ベッド？

「やっと起きたわね」

母親がくたびれたように言う。この若干散らかっている部屋は…俺の部屋か。

「よかった、夢だった…」目の前に立っている母親を見て俺は少しホッとした。

「直人、どんな夢見てたか知らないけど早く準備しなさい」

「準備？何の？」

いきなり準備とか言われても困るのだが。今は夏休みだし今日も特に用事はないはず――

「お友達が迎えに来てるわよ。合宿に行くんでしょ？」

やべええーっ！！完全に忘れてた！そうか、今日からだっただな…。

「玄関で待ってもらってるから、早くしてあげないと」

「わかってる！」

俺は猛スピードで着替えを済ませ、階段を駆け降り、玄関へ向かった。そこでは二人の友人が待っていた。

「悪い！すぐ荷物の準備するから、あと少し待ってくれ！」

「おいおい直人くん。寝坊はダメだろ」

一人は、少し呆れ笑いのタク。今回の合宿を企画した男だ。まさかタクに注意される日が来るとは…不覚。

「早くしないと置いてっちゃうよ？」

もう一人の友人、こちらは女性だ。

「すまん、怜香。持ってく物はまとめてあるから、あとはバッグに入れるだけなんだ。3分で終わらせる」

「ふふ、じゃあ3分だけ待つね。もし終わんなかったら…ふふ」

怪しげな笑みをこぼしているこのお方は、くおんれいか久遠怜香。バンド唯一の女性メンバーで、ベースを担当している。黒のロングヘアーが似合う清楚なお嬢様という感じた。容姿端麗で成績優秀、文句なしの女性だと言いたいのだが…。

「怜香ちゃん、ごめんなさいねえ。ウチのボンクラ息子が迷惑をかけちゃって。」

「いえ、そんな。普通のボンクラじゃないですか。迷惑だなんて…」
おい。普通のボンクラってどういう意味だ。

「まったく…こんな風に育てた親の顔が見てみたいわ。ねえ、怜香ちゃん。」

「そうですねえ。どんなボンクラなんですかね」

後ろから聞こえてくる会話にツツコミたいが、とりあえず部屋に戻って荷物の準備を優先させる。怜香は時々こんな調子になるんだよな…。

俺は急いで荷物を詰め込み、再び玄関へ向かった。

「お待たせ、準備出来たぞ」

「よし、では行きますか」

「3分ジャスト。さすがだね、直人」

俺は母さんに行ってきますを告げて、家を出発した。バンド合宿か…。タクがちゃんと練習するのか不安だが、楽しみなのは確かだ。頭の中は音楽のことではいっぱいだった。

まだ、
この時は。

バンドの起源

俺達は大きな一軒家へ到着し、インターホンを鳴らした。すると玄関から青年が出て来た。

「あーやつと来ましたね。集合時間とつくに過ぎてますよ！」

「すまねえな透、遅くなっちまった」

爽やかな声で怒りながらも、爽やかな笑顔を见せている好青年。彼の名は朝霧透^{あさぎり とおる}。俺達と同じ大学に通う一年生で、一つ年下だ。バンドではギターと作曲を担当している。

透とは高校も同じで、軽音部で既にバンドを組んでいた。その時の俺はドラムが叩ければいいと思っていて、バンドを組むことなどあまり考えていなかった。しかし、後輩として入って来た透に猛烈なアプローチを受けた。

『バンドを結成したいんですけど、ドラムを叩ける人が他にいないんです！平岡先輩はドラム歴一年とは思えない上手さですし、一緒にバンドを組みましょう！』というか組みます！』

確かに、軽音部の他のドラマーはもうバンドを組んでいる人ばかりだった。透は最後の頼みで俺の所へ来たのだろう。

透の熱意に圧倒され、俺はバンドへ参加することにした。もちろん、タクも強制的に参加させた。この時点で、俺とタク、そして透の三人が揃うことになる。

そこへ透が誘っていた一年生のベースを加え、俺達のバンドは発足した。透の音楽センスはバンドの中でもずば抜けていた。小学生の

頃から始めたというギターは、もちろん上手い。上手すぎるほどだった。更に作曲も出来て、アレンジに関する知識もある。後輩とはいえど、俺は強い尊敬の念を抱いた。

オリジナル曲を中心に演奏していた俺達は、ライブハウスのイベントに出たりもした。お客さんが俺達の曲にノってくれると嬉しくしょうがなかった。俺達はとても充実した活動が出来たと思う。

そんなこんなであつという間に俺とタクは卒業を迎えたが、大学に進んでもバンドの活動は続けることにした。

しかしある日、ベースのメンバーが受験に集中するためと言ってバンドを抜けてしまった。受験生を引き留めるわけにもいかなかった。

そこへ救世主の如く現れたのが同じ大学へ通う怜香だった。俺がバンドメンバーを探しているという噂を聞いたらしい。その時の俺は色々な人へ声をかけまくっていたからな…。

「平岡先輩、バンドの歴史を語ってるところ悪いんですけど出発してもいいですか？」

「お前もエスパーだったのか」

なぜ俺の周りには超能力者が集まるんだ。

「父さんが車で送ってくれるはずなんで、呼んできますね」
そう言うと、透は家の中へ入っていった。

ミーティング

「窓の外には海が見える。果てしなく広がる海。この先で、何が僕らを待っているのだろう」

「タク、それは歌詞か？」

「魂の雄叫び」

「帰れ」

今、俺達は透のお父さんの車に乗せてもらっている。助手席に透が座り、その後ろが怜香、真ん中は俺でタクは俺の右隣りという具合だ。

透のお父さんは音楽に関する深い知識があり、今回の合宿場所も提案してくれた。話によるとその場所は山の中にあるスタジオで、宿泊のための設備も整っているらしい。どんな所なんだろう。早く見てみたい。

車はもうすぐ高速道路を下りる所だ。窓の外には海が見える。タクの魂の雄叫びとやらではないが、果てしなく広がる海を見ると自然の雄大さを感じる。

高速道路を下りると、外は街中の景色に戻った。

「到着までもう少しかかるから辛抱してくれ」

と透のお父さんに言われて、俺は返事をした。山の中だ、確かに時間にかかるだろうな。その間、合宿についてみんなと話をしとくのもいいかもしれない。

「そうね、私もそう思う。練習内容とか確認しておかない？」

「怜香。お前もエスパーだったんだな」というわけで、俺は三人のエスパーと車内ミーティングをすることにした。

「皆さん静粛に。出席予定者は揃いましたね？」

「タク、お前が仕切るのか？」

「直人くん。静粛に」

「直人。静粛に」

「えっ？怜香まで？」

怜香の悪ノリが始まった…。

「ではミーティングを始めます。合宿中の練習についてですが…」

タクが計画した練習の予定を簡単に説明する。なんだ、意外と真面目に考えてるんだな。

「そして夜は『肝試し』となっております」

「ちよつと待て」

前言撤回。

「どうしました、直人くん？」

「タク、もう一度言ってみろ」

「どうしました、直人くん？」

「そっちなじゃねえよ！その前だよ！」

「肝試し？」

「ああ、それだ。そんな話聞いてねえぞ」

タクめ、珍しく真面目に考えてると思っただら…こついうことが。

「直人くん。もしかして…」

「何だよ」

タクが少しニヤけた顔で言う。

「お化けが怖いのか？」

「そ、そ、そんなわけないだろ」

「平岡先輩。お化けが怖いんですね？」

「いや、ち、違うつて。ぜ、全然怖くねーし」

「直人。お化けが怖いんでしょ？」

「だから違うつつーの！ほ、ほら、アレだよ。やっぱりバンドの合宿だから練習に集中したいだろ？」

お、お化けなんか怖くない！

「はは、必死だな直人くん！大丈夫、冗談だって」

タクは笑いながら言った。

「痛いっ！」

タクに母親譲りのロケットパンチを喰らわせてやった。全く…人を
おちよくるからだ。

その後、俺達はしっかりと練習内容を確認して、ミーティングを終えた。ちゃんとやれば有意義な練習になりそうだな。

そうしている間に、車はスタジオへと近づいていた。

カノン

「窓の外には美しい緑の世界が広がっている。この緑を守るために、僕らは何ができるのだろう」

「タク、それは魂の雄叫びか？」

「風の息吹、踊る森、照らす太陽。それはまるで」

「まだ終わってなかったのか」

俺達が乗っている車は、山中の舗装された上り道を快調に進んでいる。辺りには木々が立ち並び、風に吹かれて優しく揺れている。車の中では聞こえないが、おそらく外では葉と葉の触れ合う音が静かに奏でられているだろう。

「直人。さつきから私をずっと見てるけど、どうしたの？」

「え？ あ、いや、俺は外の自然を見て癒されてただけなんだが」

窓の外を見ていたつもりが、怜香に何か勘違いされたようだ。

「ふーん」

ふーんって。ムスツとした顔でふーんって言われた。俺、何かしましたっけ？

「怜香。俺、何かまずいこと言ったか？」

怜香は外の景色に顔を向けている。

「馬鹿野郎」

「なっ。いきなり馬鹿野郎はないだろ、おい」

痛烈な四字熟語を俺に放ったまま、怜香は押し黙ってしまった。よくわからんが、怜香の機嫌を損ねてしまったようだ。俺は景色を眺めてただけなんだけどな。

車内はしばらく会話の無い状態が続いている。透はどうやら寝ているようで、微かに寝息が聞こえてくる。タクの方を見ると、これまで透と同じくおやすみ中だ。さっきまで魂の雄叫びがどうこう言っていたのに、切り替えが早いやつだな。

オーディオから流れるクラシック音楽が、眠気を誘っているようだ。そういえばこの曲、どこかで聴いたことがある。曲名は確か――

「パイナップルじゃなくて、ジングルベルでもない……曲名はキャンオンだったような……」

「パツヘルベルのカノンだよ」

俺の思わずこぼれた独り言に、透のお父さんが答えてくれた。

「あ、そうです」

そうだ、カノンだ、カノン。俺、キャンオンって。危うく名曲が兵器になってしまったところだった。

「馬鹿野郎」

「怜香。誰にでも間違いはあるものなんだ。その間違いを糧にして成長していく。それが」

「馬鹿野郎」

「違う。それは馬鹿野郎じゃない。とにかく、人間に間違いは付き物ってことだ」

「本当に？」

「本当に」

「じゃあ、直人」

「何だ？」

怜香が久しぶりに俺の方へ顔を向けた。うむ、改めて見ると、やっぱりアジアンビューティーという言葉が似合いそうな美人だ。

「さっき見てたのは景色じゃなくて、私だよね？ そうだよね？」

「いや、景色だが」

「……ボンクラ」

と、また一言残して、怜香はそっぽを向いてしまった。俺は正直に答えたただけなのに！

「直人くん。女性の心は繊細なんだから、気を遣わなきゃ」

「いつの間に起きたんだ、タク」

「それより直人くん。そろそろ着くみたいだ」

タクが指差した前方を見る。そこには、確かに建物が見えた。

「予約時間にぎりぎり間に合いそうだよ」

と、透のお父さんがホッと安心したように言う。

いよいよ合宿開始。

この2泊3日は、バンド漬けた。音楽のこと以外は考えない。そう思っていた。

怜香

「これで全部かな。忘れ物は無いよな？」

「ありません、平岡先輩」

俺達は駐車場に停めた車から荷物を降ろし、車内に忘れ物をしていないかチェックした。駐車場の周りを見渡してみると思ったよりも開けた場所で、少し離れた街を眺めることもできる。

建物の方へ振り返ると、こちらは白っぽいシンプルな外観ながら、降り注ぐ日差しに照らされて煌めいて見える。

「綺麗だな」

タクがギターケースを肩に掛けながら呟いた言葉に、怜香もうんうんと頷く。

「さて、準備が出来たみたいだしロビーに行こうか」

運転に疲れたのか、体操のように体を伸ばしたり捻ったりしながら、透のお父さんが言った。俺達は荷物を持ち、建物の方へ歩き出した。

そういえば、俺以外のメンバーは自分の楽器を持って来てるから手荷物が多いんだよな。俺はスタジオのドラムを借りるから、ステイックやその他の小物しか持って来ていない。まあ、タクと透はともかく、怜香は一応レディーだ。バッグくらいは持って差し上げるのがジェントルマンというものだろう。

「怜香様。よろしければそちらのバッグをお持ちしましょうか？」

「馬鹿野郎」

「私は馬鹿野郎ではありません」

「ボンクラ」

「俺はボンクラじゃない」

「馬鹿ボン」

「やめろ。その名前はどこかで聞いたことがある。彼は天才だ」

怜香め、心なしか表情が楽しそうだ。風になびく黒髪と相まって美しいのがニクイ。

「じゃあ、お言葉に甘えてもいいかしら？　優しい紳士さん」

怜香が両手で黒いバッグを差し出す。

「お任せあれ」

と、それを受け取り肩に掛ける。しかし予想以上に重かったせいで一瞬よろめきそうになった。この重量感、俺のキャリアバッグとは比べ物にならない。

「怜香。このバッグ——」

「あ、直人。バッグの中身とか聞いてきたら抹殺するからね」

「バ、バンド最高！」

緊急回避。

「ふふ、いきなりどうしたの？」

危ねえ。今のは本当に危なかった。訳のわからんことを言ってしまったが、存在を消されるよりはマシだ。

「とりあえず部屋まで持っててね」

「もちろんです」

「喉が渴いちゃったな。飲み物ある？」

「こちらをどうぞ。冷たいお茶です」

「後で靴磨いて」

「何なりと」

ジェントルマンというより召し使いだな……。

ロビーで受け付けを済ませた俺達は、ひとまず部屋へ荷物を置きに向かった。透のお父さんは合宿が終わったら迎えに来ると言い残し、車へ戻って行った。今回の合宿費用もかなり負担してくれて、本当に頭が上がらない思いだ。

「早くして、直人」

「ああ、悪い。ちよつと重たくてな」

スタスタと階段を上る怜香の後ろに、ヘビー級のバッグを持った俺が続く。男三人は同じ部屋なのだが、流石に女性である怜香には別の部屋が用意された。しかし、自分の荷物を先に置いてきたとはいえ、この重さには参ってしまう。

「この部屋だよ」

「はあ……、こんな短い時間で疲れたのは久しぶりだ」

怜香に続いて部屋に入り、適当な場所へバッグを置く。

「ここでいいか？」

「うん、ありがと」

振り返りざまに笑顔で頷く怜香。あ、可愛い。……いかんいかん、見とれてしまった。

「一人で使うには少し広い部屋だな」

部屋の方へ目を逸らす。

「そうね。直人、こっちに来る？」

「それじゃあ部屋を分けた意味が無いだろ」

喜んで！　と言いたい所だが、我慢だ。

「冗談。荷物の整理終わったらそっちの部屋に集合でいい？」

「ああ、よろしく頼む。じゃ、また後でな」

そう言って部屋を出ようとした途端、怜香に腕を掴まれた。

「何だ？」

じつとこちらを見つめてくる怜香の瞳にドキドキしながら聞いた。

「靴磨き」

「……はい」

SENSE

「さうて、練習を始めようか」

俺の全力靴磨きが終わり、男組の部屋に四人が集まったところで、タクが切り出した。

「そうですね。タク先輩、新しい曲の歌詞はちゃんと書いて来てますか？」

「もちろん」

タクがテーブルを離れて窓際のベッドに向かい、そこに置いた荷物からノートを取り出す。この部屋にはベッドが四台あるため、一台は荷物置きにしている。

「とりあえず読んでみて」

テーブルに戻ってきたタクは、ノートを開いて俺に差し出した。開かれたページを見ると、丁寧な字で歌詞が書き込まれていた。横線で何度も消した跡があり、書き直しを繰り返していたようだ。普段はふざけているように見えても、やるべきことはしっかりやる。タクのいい所だ。

「あまり褒められると照れるよ、直人くん」

エスパータク。忘れてたぜ。

それより歌詞だ。今度は感情的な曲だから、言葉の一つ一つが更に重要になる。タクはどんな歌詞を書いてきたのだろうか。

『——確かに感じたんだ 君の温もりを
それは紛れも無い 君の存在証明——』

「……………うーん」

一通り読んだ俺は少し首を傾げた。

「ダメかい？」

「なんか、こう……どつかで聞いたような歌詞なんだよな。タクの独特のセンスが発揮しきれてない」

「こういう曲が初めてだったからね。やっぱ合わないか」

「いや、曲自体にはマッチしてると思うが。透はどうだ？作曲者としての意見を聞きたい」

ノートに書かれた歌詞を読み、透が口を開く。

「確かによくありそうな歌詞ですけど、雰囲気は僕の頭に浮かんだメロデーと合ってる気がします。この歌詞を基本に練習して、少しずつ手を加えていきましょう」

「そうだな。タク、まずはこの歌詞で歌ってくれ」

「オッケーイ」

「それと怜香、ベースの音は……って、何で泣いてるんだ？」

俺の左隣りに座っている怜香は、なぜか涙を流していた。

視線の先にはタクのノート。

「……まさか、感動して泣いてるなんて言わないよな」

「……えぐつ、えぐつ」

「マジ、か？」

「……………うっ、うっ」

零れる涙を指で拭いながら頷く。なんて感受性豊かな女性なんだ。この段階で泣かれたら、演奏中にも泣き出してしまうのではないかと心配になる。

「まあいい。話を戻すが怜香、ベースの音のイメージは固まったか？」

「えぐつ、うん」

「よし。じゃあこれから一度みんなで合わせてみて、そのあとまた各々感想を述べることにしよう」

実際に音を出して合わせないと始まらない。そして席を立とうとした時、透に呼び止められた。

「あ、平岡先輩。一ついいですか？」

「どうした？」

「一週間くらい前にまた新しいメロディーが浮かんだったので、その曲もパソコンで編集して持って来てるんですが」

「おお、すげえな。聞かせてもらってもいいか？」

「はい、もちろんです」

透が持参していたノートパソコンを開き、編集したファイルを呼び出す。再生のアイコンをクリックするとテンポの良い疾走感溢れる曲が流れ出した。

「いいな、この曲。メロディーがわかりやすい」

「そうだね。ドラムの音も直人くんが実際に叩けばもっと明るく響くだろうし」

このファイルは各楽器が編集ソフトウェアのサンプル音で演奏されているため、少し機械的な音になっている。生演奏になればよりメロディアスで疾走感のある曲になるはずだ。

「透はさすがだな。せっかくだからこの曲も練習してみるか」

「そうですね。あ、でもタク先輩は歌詞がないと歌えないですよね？」

「うん。とりあえず適当に言葉を入れて歌ってみるよ」

「じゃあ、行くか」

話をまとめた俺達はスタジオへ向かい、練習を始めることにした。スタジオにはいくつか防音室があり、俺達はBという札が貼られた防音室を使うことになった。部屋の中には大きな鏡があり、パフォーマンスの確認も出来るようになっていた。

俺は受付で借りたチューニングキーを使ってスネアやタムの張り具合を調整し、シンバルなどを叩きやすい位置に配置した。

試しにスネアを軽く叩くと、透き通った綺麗な音が響いた。

「スネア、いい音だね」

怜香がその音を聴いて言った。確かに、思ったよりいい音だ。今まで行ったことのあるスタジオの中で一番かもしれない。まあ、叩きようによって良くも悪くも変わるのだが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5082w/>

君の温度

2011年12月3日16時52分発行